夜の露臺

竹久夢二

THE BALCONY
IN THE NIGHT

夜の露臺

夜の露臺

MADE IN JAPAN.

THE BALCONY. ON THE EVE.

MADE IN JAPAN.

目次

戀慕夜曲 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 一
街燈 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 五
巣 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 七
南海夜話 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 八
エプリフール ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 一八
灯ともし頃 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 二〇
清怨 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 二三
雪の夜語 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 二四
雪の扉 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 四八
朝の鐘 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 五〇
なぎさ ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 五三
母 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 五四
バルコン ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 五六
小曲馬師 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 五七
裏の菜園 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 八三
ふるさと ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 八五
常夜燈 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 八六

眞實（まこと）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊八七
ためいき＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊八八
涙（なみだ）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊八九
わすれなぐさ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊九〇
佐渡（さど）は四十五里（り）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一一三
鈴（すゞ）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一一五
心（こゝろ）づくし＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一一八
めんない千鳥（ちどり）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一二〇
らくがき＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一二三
つばくら＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一二三
もしや逢（あ）ふかさ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一二四
蘭（らん）燈（とう）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一二四
春（はる）の宵（よひ）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一二六
ゆく水（みづ）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一二七
伏見（ふしみ）古城（こじやう）跡（せき）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一二八
岸邊（きしべ）にたちて＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一三〇
秘（ひ）密（みつ）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊一三三

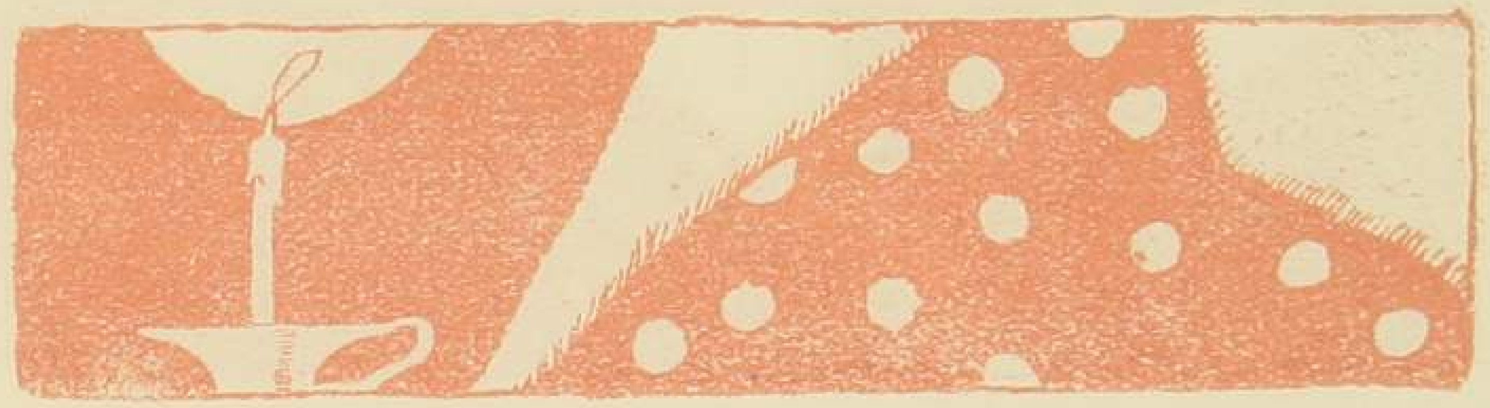
夜の露臺

竹久夢二作

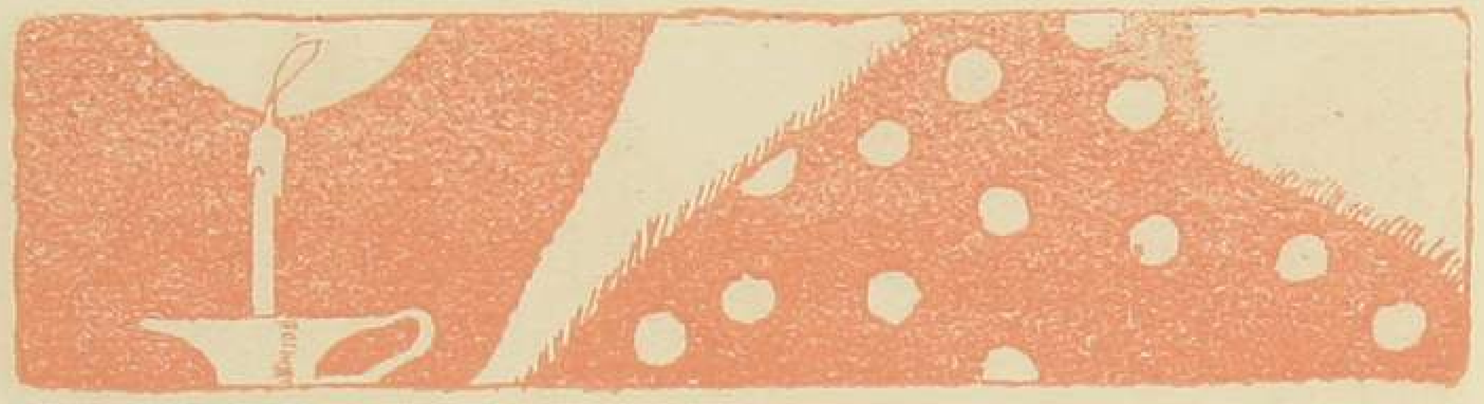
戀慕夜曲

いつはしも戀ひぬ時とはあらねども夕かたまけて戀はすべなし

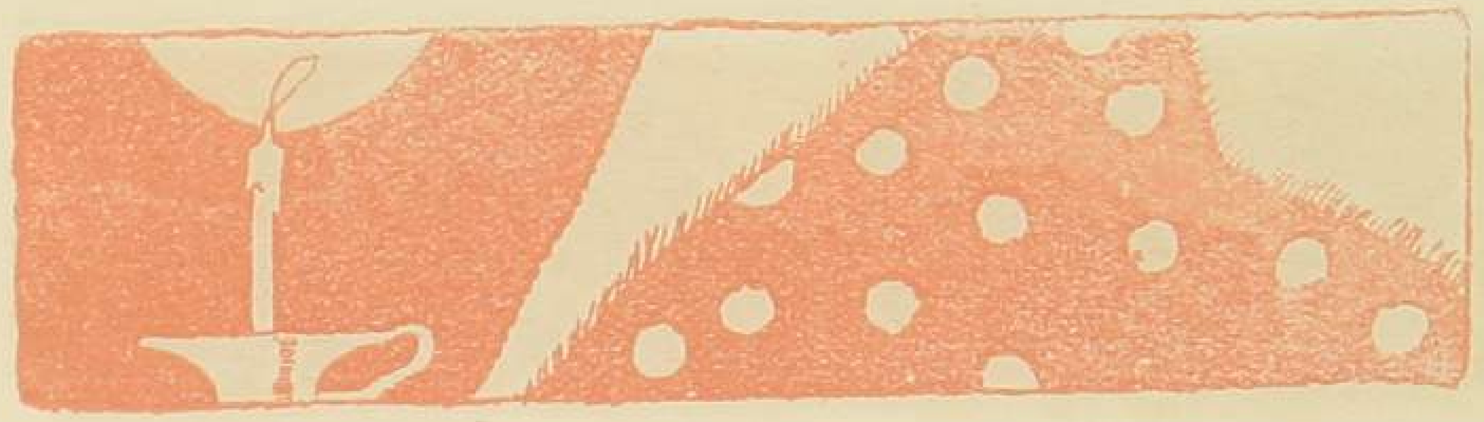
いはれなき少年の時の悲哀のごとく
黄昏は街をつゝめり。
路傍のプラタナスは葉をたれて
遠くはるかなる子守唄をきく。
悔悟と倦怠との闇のうちより



そこはかとなく咲きいづる花のかず〳〵。
七夕の夜に見つる灯の色
宵宮の日に見つる灯の色
芝居の幕合に見つる灯の色
かぎりなくほのかなる夢の花。
涙ぐみし睫毛のひまに
光りては消えゆきし
忘れたる不可思議の夢
やさしくも甦る。

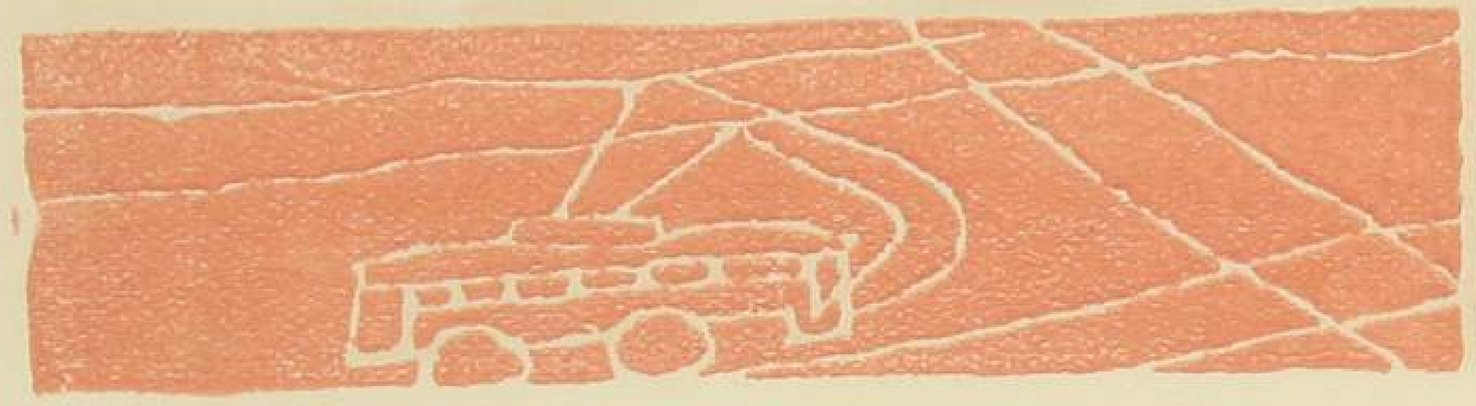


東京の夜こそ悲し。
街を流るゝ堀割の水は
三味の音と昔の唄とをのせ
戀人の髪の香のごとく
ほのかにやさしく忍びよるなれ。
少年の門邊を過ぎし巡禮の娘は
鉦たゝきはる〴〵と行きやゆきけむ。



「黒髪」の唄の節われに敎へし
眉青き人のたづきやいかならむ。
あはれなる性の懷郷病は
やるせなく侘しくさしぐむ。

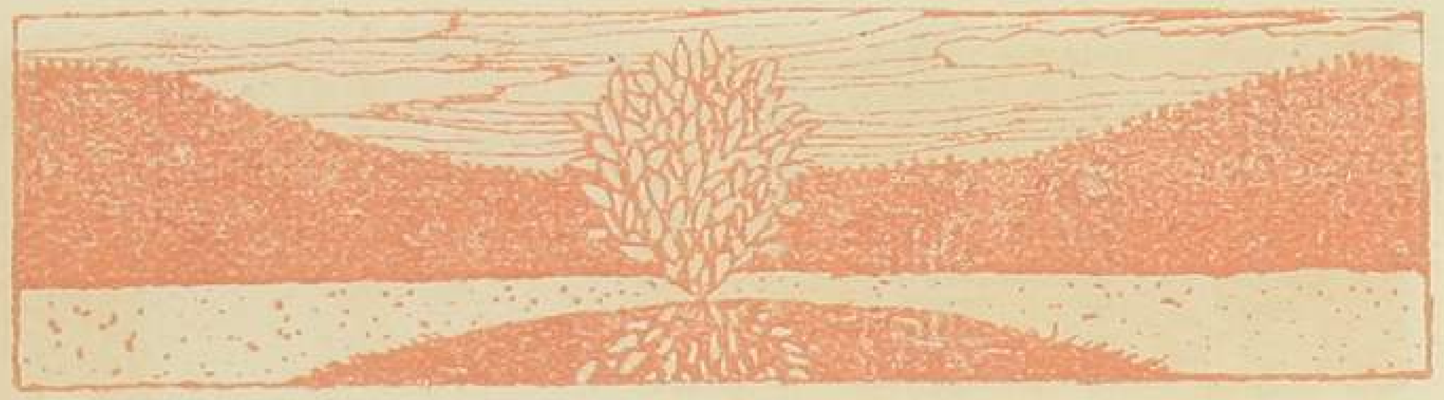
若く愚かに
あどなき夢を追ひてさまよへる
東京の夜こそ悲し。



街燈

巷をゆく男よ、女よ。
街樹を吹く風も、街の上の空も
この若者の悲哀にかゝはりもなし。
巷にて彼に行逢ひし友よ。
いま若者の心は悲哀に充てり

手をとらば涙あふれむ。
悲めるものは、ひとり、ゆくこそよけれ。
悲哀の、いや、果まで歩みゆかしめよ。
悲哀のつくる日なきごとく……。



巣

綠色のカアテンを引きませう
ひとに巣を知られぬやうに。
そつと靜かにしてゐませう
ふたりの小鳥の眼さめぬやうに。
あまり喜び過ぎぬやうにしませう
いたづらな運命に妬まれぬために。

南海夜話

それは、ある南の方の寂しい海濱に、人の住むともおもはれぬ古びた別莊があつた。そこに一人の年老いた別莊守が音もなく住んでゐることを知つてゐる外、この村の人々は、その別莊について何ひとつしらなかつた。春が來ても夏が過ぎても、その別莊の門は開かれたことはなかつた。しかしたゞ一度、一昨年の暮の十

二月もおしつまつた二十何日かのこと、この漁村に程近い停車場から二臺の俥が夜更けてこの別莊の裏門に附けられたことがあつた。それがすぐに小さなこの村の話の種になつた。その翌日、このもの寂びた別莊に、十二三ばかりの女の兒と一羽の白鳩とを見かけたものがあつた。その女の兒の服裝から考へると、おほかたこの別莊の持主の娘であらう。それにしてもまだ年端もゆかぬ女の兒をひとりこの別莊に送つた親達も情知らずだと言ふものもあつた。おほかた生の母親に死別れて繼母のつれなさに逃げてきたのであらうと早合點して貰ひ泣きをする女房もあつた。

それから三年目の正月のことである。
お嬢様あけましてお芽出度う厶ります。
お芽出度うよ、爺や。あたし今日から十五になつたのね。
さやうに厶りまする、お嬢様。この爺奴がお預りいたしまして
から、もうはやこれ三年になりましてござりまする、お嬢様。
爺やは幾歳になつたの？。
はゝゝこれは御戯談で厶りまするお嬢様。したがまあよう尋ね
て下さりました。はて、幾歳になりましたやら、お月様の影を見
て、もういくつねたらお正月だと言つて、お正月がくるのを楽し

んで待ちましたのは、いやもう、昔、昔のその昔、そのまた昔の昔話でございまする。この別荘を預りましてからは暦もなければ世間もなく、花が咲けば春、蟲が鳴けば秋、嬉しい事もないかはりに悲しい事もござりませぬ。それにつけても、お嬢様は、花のさかりの年頃をこの草深い片田舎に、漁師の子供等と一所になつて、小鳥の唄を歌つてお遊びなさるのが、爺やは心外でなりませぬ。先奥様が御在生なら、今頃東京のお屋敷では、かるたよ羽子よと夜の明けるをまちかねて遊び暮して御座らつしやるものを……。

爺や。おまへは、もう來年からは母様のことは言はないつてあ

たしに約束したぢやあないの。

これは不覺な、とんだことを申上ました。したがお孃樣、お孃樣がその御被布を召しましてお膝の上に、かうちやんと御手をお置き遊ばして、爺やつて仰やる御樣子が、まあお口つきなら御聲なら先奧樣にそつくりで、つい思出したので厶ります。

爺や、あたしそんなに母樣に似てゐて？

はい、はい。似て御座らしやる段では厶りませぬ。先奧樣は、何を遊ばすにも爺や、爺やつてね。それはもう思ひやりが深くて、御發明で、お品がよくて、とんともう物語にあるお姫樣の樣で御

座らつしやつた。

爺やは、御姫樣つてもの見たことあつて？

なか〳〵もつて、ついぞ見かけたことは御座りませぬが、なんでも、若い頃京見物をいたしました折、清水の坂の下でちらと後姿を拜んだことが厶りまするが、いやもうとんとお日樣を拜むやうにまぶしいものでござりました。それから一度、エリア物語でバビロン城のお姫樣が、父君國王樣の御怒にふれて、ある夜城を忍んでお出になる條をよんだことがござりました。

お可哀さうね。

なか〳〵哀れな話で厶りました。エリア姫様、なんと淋しい山路ではござりませぬか。と侍女が申上げますと。そなたは、淋しいと思やるか、笑ふにも泣くにも、歌ふにも、文をかくにも、心のまゝならぬ王城の淋しさにくらべては、鳥の様に歌ひ、雲の様に走り、詩人の様に思ふことが出來るこの旅路が、どのくらゐ自由で心やりになるであらう。あゝ、あの山の彼方を見や、紫の夢の様に連つたあの山の彼方の、あの淡紅は、わが身を待つてゐる幸福なのだ、ねえ、そなたはさうは思はぬかや。

さやうにエリア姫が仰やるので厶ります。

そしてそのエリア姫はどうして？

いやもう物語といふものは他愛のないもので、そのエリア姫は長の旅路に煩うてたうとう敢なくなりましたわい。

まあねえ。

もしお嬢様。お泣きなされまするな。それはたつた物語の姫君の身の上に過ぎませぬ。さ、さ、そのお姫様の唄をこの爺奴が歌つて御覧ぜませう。えゝと、さうぢや〳〵。

　小鳥でさへも巣は戀し
生れ故鄉のバビロニア

なんと面白い唄ではムりませぬか。

ほんとにねえ。爺や、あたしもエリア姫の樣になりたいわ。

これはまあとんでもない何を仰りまする。エリア姫はエリア姫お孃樣はお孃樣。さあ〱今日はお正月でムりまする。庭へ出で羽子でもついて遊びませう。

濱邊のお正月も淋しく過ぎて、春の早いこの海邊の村には早咲きの桃の花さへちらほら咲き初めた。ある日のこと、別莊の鳩が首に紙片を括りつけて雲の多い春さきの空を北の方へ飛んでいつた。

その紙片には「小鳥でさへも巣は戀し、……」の唄が書いてあつた。

そして東京に住むこの別莊の主人は涙ながらにそれを讀んだと言ふ。

エプリフール

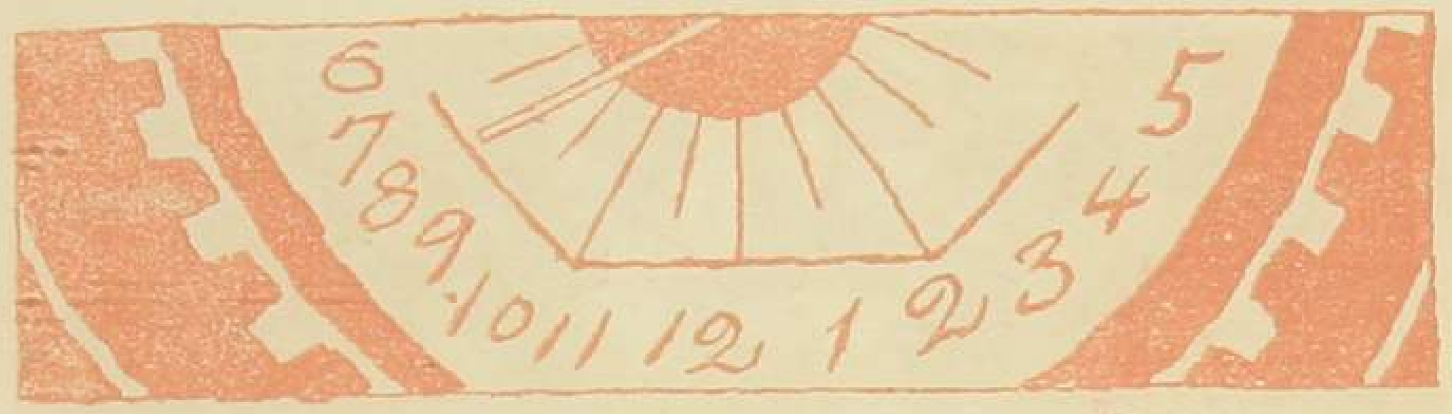
夜は喪服をひきてすぎ
白き光のしのびきて
かなしき床をさしのぞく
エプリフールのつぎの朝。
やさしきことのかず〳〵も

エプリフールの宵なれば
嘘も誠も薄情も
今朝は忘れであるべけれ。
されどほのかに、やはらかく
みだれて散りし髪の香は
嘘のなかなる誠にて
忘れであらむいつまでも。

灯ともし頃

清く悲しく今日もありけり。

門づけの御詠歌に
わが孤獨なる靈は顫へつゝ
窓近き青葉の風の搖籃に
やさしく涙ぐめる心は



幼兒のごとく眠にいるなれ。

清く悲しく今日も暮れにけり。

清怨

もしや薔薇がきみならば
しづかに搖る丶微風に
露さくだけておつるとも
この身その葉にならうもの。
もしや小琴がきみならば

青い五月の小夜曲
夜は夜もすがら歌ひつ丶
この身は絃にならうもの。

雪の夜がたり

少年の時分に受けた感化は、隨分いつまでも忘れないものだといふ話を、ある雪の晩に四五人友達が寄つてトランプなんかした後で話合ひました。

僕は十二の時まで汽車を見たことがなかつたよ。何しろ町までゆくには七里の山越しをしてゆくやうな田舍だからねえ。何でも

小學校の二年の時だつたね、學校の遠足で町に近い所まで行つた事があつた。その時一里程向ふの山と山との間を汽車が通るから見てろつて先生が言つたので、一時間ばかりも皆でそこへ立つて見てゐた。すると黑い棒のやうな物が、つうつと通つた。あれが汽車だ、と先生が言つた。恭さんの話はかうであつた。

こんな田舍に育つたんだから親爺は僕が繪描になるのを、まるで乞食にでもなるやうに輕蔑したものさ。母親に貰つた小遣をためて色鉛筆や繪具を買つて來て納戸にかくれてそつとやつてたものさ。すると親爺が何時の間にかがきつけて、がらつと障子を開

けて入つて來て、何も言はずに繪具も紙も取上げて捨てゝしまつた。そんなにされたもんだから繪を描くことは、もうこの上もない罪惡のやうに思ふやうになつた。それでもこの罪惡はやめられないで、たうとう繪描になつちまつたが、つひ近頃まで繪を描いてる時、障子の音がするとびくつとしたものだ。

ガラス戸の外では、まだ雪が小止みなく降つてゐる。時々風にあふられて、畫室のガラス屋根へ吹きつける音がざら〳〵ざらと聞えた。鈴さんは、ストオブへ新しく石炭をくべた。

僕にも子供の時ひどく印象された話が一つあつたよ。と鈴さん

は外套の襟をたてなほして話し出した。

それは鈴さんがまだやつと九歳になつたばかりの初夏の頃だつたさうだ。鈴さんが生れた村の風俗や、鈴さんの家庭を知るには、その頃鈴さんが着てゐたキモノを見ればすぐ分る。鈴さんの村から一里ほど山の奥に鈴さんのお母樣の里があつた。その村の祭に鈴さんが招かれて行つた時のことだ、鈴さんは何でも黄色な節織の柔かいキモノを着てゐたさうだ。そして帽子は茶色の山高帽で、下駄は堂島下駄つていふ表附で、白足袋に仙臺平の袴といふ服裝だつたさうだ。それにまた帶が二本ごつこの博多といふこつたも

のだつたのです。

え丶さうですつてね。よく鈴さんのお母様が話してゐらしたわ。その博多の帶をね、爪で持つてきゆつきゆつと擦るのがお好きだつたつて。その頃の事は、あたしも記憶がないけれど鈴さんが十三位ゐの時分だつたでせうか。よくあの裏の酒倉の前の柿の木の下でお芝居ごつこをした時なんか、鈴さんが白神源次郎だつて、その頃はもうだいぶ小さくなつた黒いフクリンの洋服に赤い毛絲でモオルをつけて、ちやん／＼坊主を生捕るんだなんて、あたしのおさげ髮を引張つたりなんかしなすつたわ。

さうだつけな。おてるさんもあの時分にまだ小さかつたね。さう／＼あの洋服では、可笑しい思出があるんだ。なんでもはじめて學校へ上つた時あのフクリンの洋服をきて新しい靴をはいて學校へいつたんだね。すると田舍のこつたから生徒が大騷ぎさ。鈴さんが服をきてきたつてね。みんなでもつて騷ぎたてたもんで、俺も好い氣になつてたうとう學校の前の水田の中へ飛びこんだ。俺もよつぽどお調子者だつたらうが、この靴は水の中へでも入れるよとか何とか言つて威張つたんだらうねえ。

あの頃あなたは、丸い皮の箱ん中へ入つた大きな時計を持つて

たわね。これはセコンドつてものだつて、よく見せて呉れたわ。

ギヤマン渡來の時代のことだね。と畫家の恭さんが言ふ。

さうさ。あの頃はまだ世が好かつたねえ。福澤諭吉の「學問のすゝめ」つて言ふ本が讀めりや一ぱしの新智識だつたんだからね。

それからお母樣の里のお祭はどうしたんだい。今まで默つて皆の昔話をきいてた哲つあんが口を切つた。

さうだつけね。それから…… いやこれからつて言ふ所だつたね。

なんしろその頃のことは前後の模樣をはつきり覺えてないが、なんでも母の里は、そりやひどい山ん中でね。どつちから行つても

山越しでゆく所なんさ。恰度、綠色の大きい皿の中に家を置いたやうな所だつた。その皿の中程に一つ小さな池があつた。母の家はこの池の水が流れ出る小川の堰の上に立つてゐた。その小川には土の橋が架つて、そこから母の從兄の家の門へゆくやうになつてゐた。なんでもそこには影の深い並樹があつて、夏の終りになると桃色の木蓮に似てもつと小さい花が咲いてゐたやうにおもふ。

お祭の日には、誰に連れられて來たか一つも覺えてはゐない。

祭の前日は、この村の子供たちと村はづれで遊んでゐた。

おんば日傘で日が暮れて
提燈ぶら／＼まゐりましよ

曼珠沙華の莖を折つて提燈を作つて、めい／＼にそれを提げてこんな唄をうたひながら遊んでゐたやうに思ふ。その節曼珠沙華が咲いてゐたかどうかも記憶が充分ではない。けれどあの小川の岸の所でよく曼珠沙華を摘んでは、その莖で鼓をこさへたものだ。その鼓を鳴らすと狐が山から出てくると言つて誰も鳴らすものはなかつた。

なんしろ祭の前の日、村はづれでこんなにして遊んでゐると、

遊友達の一人が峠の方を指して、

車がくるよ、車がくるよ。と言つたのです。なんにせよ、こんな草深い山の中へ人力車がくるといふことは、婚禮とか葬式の外は、めつたにない事だつたのです。その他の時は、年の一度の休暇に東京の學校から春樹さんと卓二さんが歸省する時車で歸る位ゐのものでした。前に言はなかつたけれど、春樹さんと卓二さんは母方の從兄だつたのです。なんでもその頃、慶應義塾へ入つてゐたんです。二人ともたいへんお酒なんか呑んで、お金を澤山費つたつてお母樣が私に言ひましたつけ。お前も今に大きくなつた

ら東京の學校へ出したいけれど、春樹さんや卓二さんのやうになると困るからつてよく言ひ〳〵しましたつけ。

子供の事だから何のことか知らなかつたけれど、よくうちのお母樣と春樹さんのお母樣とで話してた事は小耳にはさんでゐる。

内の人があんなに律義だから却つて子供がこぢれると思つてあたしが陰になり陽になつて、不自由のないやうに不自由のないやうにと思つたのが惡かつたのさ。

まあねえ、姉さんもどんなにか心配でせうねえ。そしてこの頃は學校は休んでゐなさるんですか。

東京へ出したつて學校へはちつとも出ないつていふ始末だもの。内の人ももう勉强なんかさせないつて、この夏からずつと遊ばせてあるんだよ。

まあ。どうしてそんなにおなりだらうねえ。町の學校へ行つてなさる時分には、二人とも學校中のお手本になるほど出來てゐたつて言ふのにねえ。

卓二の方はまだ年も稚いし、茶屋酒がしみたつて言ふほどではないんだけれど、なんせい兄の方はあの通りの氣心の大きい性だもんだから、友達に誘はれりや否だと言へないんだね。それにそ

の金彌つて言ふのが、この間もあたしに手紙を越したが、なか〳〵情のこもつた文面でねえ。こんなにまで思つて呉れるかとおもつて、私でさへ涙がこぼれたよ。賤しい稼業はしてゐるが、まんざら嘘欺とも思へないの。

まあねえ。

まだお母様にはお目にかゝりませんけれど、お噂はつね〳〵承つて居りました。私風情がお母様と申上げるのも面伏せながら、生落ちると人手に育つて生みの親さへ知らず、いつも氣をはりつめ、つひぞ甘へたこと一つ人に言つたことのない私、近頃不躾

な手紙お許し下さらばお嬉しく存じ候つてね。とても叶はぬ縁とはあきらめ居り候へども、此方ばかりは前にも後にも春様ひとりと心に思定め居り候へば、せめて春秋のおたよりばかりはお許し下さるやう、まげて母上様にお願ひいたし候

まあねえ。

手紙を出して母と二人、こんなこと言つてゐるのを聞いた事があつた。

卓二さんはいつも默つて本を讀んだり、ものを考へてゐる性の青年でした。それにひきかへ春さんの方は、誰にでも調子がよく

て、笛を拵へたり、子供にお伽噺をして聞かせることが上手で、男のくせに三味線でも、お琴でも彈けたものだ。細長い綺麗な指に金の指環をはめてゐた。何のことだかしらないが、その指環をみせて、こりやあつたかいんだぜ。つて私に言つたことがありました。その上、春さんは繪を描くことが上手で、いつだつたか文藝倶樂部の口繪を寫して私に吳れたことがあつた。

春兄さん。この人はたいそう長い帶をしてゐるね。つて口繪の寫眞を指して私が言つたら。

あゝ、そりやだらりつて言ふんだよ。京都ぢやみんなそんな風

に帶を結んでるんだ。これで繪日傘をさして四條の橋を鈴のついた木履をはいてちんがらころと渡るんだ。

それぢや辨慶の出る橋なのね。つていふと。

ありや五條の橋さ。

もつとこんな寫眞ない？　いつも「東京新名所」だの「東京文明開化之圖」なんていふ畫帖を見せて貰つてゐたのに、文藝倶樂部の寫眞が面白かつたので、さう言ふと。春さんは笑ひながら、君も我黨の士だね、つて解らないことを言ふ。それでも春さんが笑つた意味はおぼろげに解つたやうで、すこし恥かしいやうな

氣がした。春さんは「東京百美人」つて言ふ寫眞帖を出して見せた。なんでも表紙は青海波の模樣のついた大きな本だつた。なんだか奇妙な髮に結つた人の顏ばかりが並んでゐた。その下に活字で男のやうな名前が書いてあつた。

ほら、この間君に見せた寫眞帖の中に淺草の十二階つて所があつたらう。あの中にこの寫眞の繪姿がみんなかけてあるんだぜ。

そしてどうするの。

どうつて、どうもしやしない。たゞ見るんさ。

車が來たよ、つて一人が言つたので皆んな峠の方を見た。峠の

白い坂路を黑い車が、洋傘をさした人が乘つて、木立に見えかくれして降りてくるのです。物見高い村の子供達は言合したやうにその方へ走つて行きました。

あ、女だ。一人が新しい發見でもしたやうに叫びました。やはり車の上の人は女でした。私はすぐにその人が、お母樣達の話題に上つた人だと、なぜかすぐに感じました。それは、必ずしも髮の格好や着物の樣子が「東京百美人」の中の人達に似てゐたからではありませんでした。私達は路をよけて、車を通しました。それは何處の田舍の子供でもがするやうに、いやに羞んだやうな風

をして、じろ〳〵と盗視したのです。非常に首の長い人だと思ひました。それから私達は車の後から村の方へついて走つたのです。村へつくと、車の上の人は車夫を呼止めて、私達の方を振り返つて、

川上春樹さんのお宅は何處ですか。と聞いた。皆は、それには答へないで私の顔を見た。それはこの子供の身内ですと答へる意味と、お前答へろといふ意味だつたのです。車の人は誰もいやに遠慮して答へないので、順々に皆の顔を見て、仕舞ひに私を見たのです。

まあ！　その人は驚いたやうにかう言ひました。

坊ちやんは春さんの弟さん？　さう言つて聞くんです。私はびつくりして、默つて俯いてゐた。すると外の子供が、あゝ、さうだよ、と言つた。女の人は車から降りて來て、私の傍へ寄つて來ました。私は眞赤になつて立すくんだ。

まあ、よく似てゐるわ。耳なんかそつくりね。

私は先きに立つて歩いた。

春さんは、どうしてゐらして？　女が聞きました。

よく知らないの。私は知らないから、知らないと答へた。

春さんのお母様は、ゐらつしやるわね。女は何でもすつかり知つてゐるやうな口吻できいた。私はすこし親しみを感じながら居るよ。と答へた。

やがて春兄さんの家の門の前まで來た。

此處だ。子供達が言つた。

女の人は、車夫に何やら話しておいて、門を入つて石疊の上を玄關の方へ歩いていつた。

すると内から障子を明けて、春兄さんのお母様が出て何やら言つてゐた。だらりと黒い羽織を着た女の人は、玄關の前へ立つた

きりで、お伯母様に何か話してゐた。どんな話しをしてゐたのか子供の私には知る由もなかつたが、なんでもだいぶ込入つた話であつたことは、間もなく女が襦袢の袖で眼を拭いてゐるのでも解つた。お伯母様も泣いてゐた。

ぢやそれが金彌だつたんだね。恭さんが聞いた。

どうもさうらしい。だが子供の時分の記憶つてものは、まるで夢のやうで、それから金彌がどうしたか、春さんがどうしたか少しも覺えない。

それからその春さんとやらには逢はないのか？

あゝ、十四の時、國を出たきり、僕の家は北海道の方へ移住するし、春さんの家はすつかりいけなくなつて何處かへ行つちまふし、その後少しも音信がないのさ。

なんでも春さんは、朝鮮にゐらつしやるつていつか花井のお叔父樣が話してゐらしてよ。

さうかねえ。やつぱり今も好い事はないらしいねえ。でも卓二さんの方は、長崎で造船會社か何かへ勤めてゐるさうだ。なんしろあの時、どうして春さんは出て逢はないんだらうと思つて、わけもなく悲しい氣がしたよ。今でも金彌の顏は覺えてないが、泣

いてゐたいぢらしい後姿ははつきり記憶えてゐる。

鈴さんは、さう言つて口を結んだ。窓の外は、まだ雪が止まぬらしい。

雪の扉

叩けどもたゝけども
閉れし扉はまた開かれず
閉れしまゝ
夜は更けわたりぬ。

いまはまた何をもとめむ
さら〱と雪はふる

こゝろよく泣かしめたまへ。

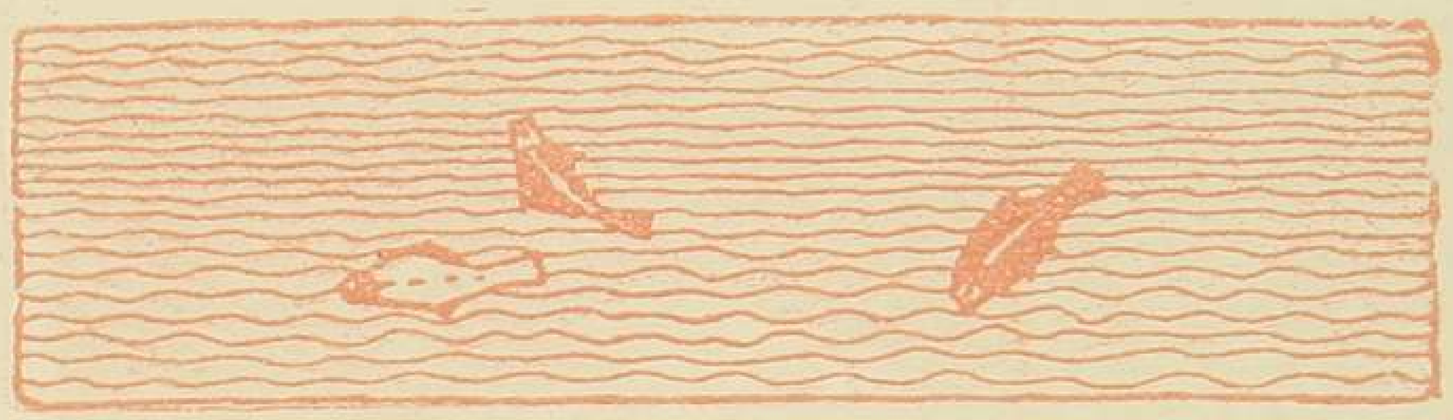
朝の鐘

釣鐘草は
おごそかに朝の鐘つきいだせり。
ぽつちりと夢よりさめし雛菊は
眸をあげて青き空をあふぎぬ。
地上の神々。
わけても、ミユウズの神よ。

今日も我等の若き命のために
光と心とを與へたまひしことを感謝す。

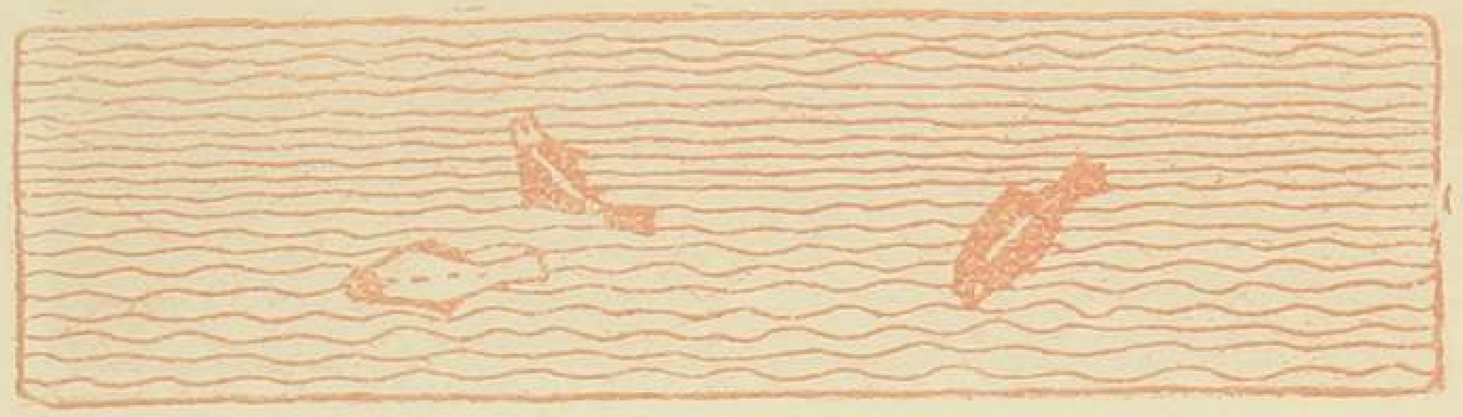
永久とは、ゆめ願ひまつらじ
今日もまた、たゞ今日のために
若き日の歌を聲高く歌はしめたまへ。

かく雛菊の祈りし時
日の光は野にみちわたりぬ。



なぎさ

いづこより來たまひしやと
眞砂は聞きぬ。
名も知らぬ南の島より。
椰子の實は眼を伏せぬ。
いづこへ行きたまふ。
失ひし幸福をたづねて



ゆくへも知らず……。
昨日につゞく波の音は
かへらぬ旅人の唄を歌へり。

母

夜は夜もすがら母うへは
わたしのために靴下を
ちく／＼編んでゐらつしやる。
朝におろした靴下も
晩には大きな穴があく。
夕となればあか／＼と

ランプのもとに母うへは
破れた穴をつぎながら
唄を歌つてゐらつしやる。
母の情のしみ／＼と
破れた子供の心をも
悲しい子供の涙をも
ほごようふいてたもるもの。

バルコン

泣かまほしさに露臺によれば
ちやうご別れた宵のやう。
異人屋敷の煙突に
きみが情のうすけむり
身もほそ〴〵と消えゆけり。

小曲馬師

品川沖のお臺場跡の埋立地で、バイロスキイ曲馬の一行が興行したことがあつた。一行は高架索の曲馬師を座頭に、コサックの少女や、支那の曲藝師や、シンガポールのニグレスや、その他世界のあらゆる國の男や女が集つて、その國獨特の曲藝や、舞踊や、唄などを歌つてゐた。中で一番日本の子供達を喜ばせたのは、印

度生れの象であつた。

ある土曜日に、乙吉が學校から歸ると、品川の伯母樣から電話で、バイロスキイの曲馬が來たから見においでといふ口傳であつた。乙吉はお母樣のお許を得て、ひとりで電車にのつて出かけた。電車の中にも、バイロスキイの曲馬の繪びらの廣告がかけてあつた。それには火の輪をぬける虎や、馬の上で踊るコサックの少女だの、太鼓を叩く象の子だの、繪で見てさへ乙吉は躍上るほど喜んだ。

乙吉は、從兄妹達とそれに伯母樣を加へて四人、その晩曲馬を

見に出かけた、伯母樣は、バイロスキイ氏の命令のまゝに馬が腰を曲げて觀客にお辭儀をするのを見て

あれを御覽なさい、馬でもあんなによく言ふことをきゝますよ

と仰つた。

從兄は、コサックの少女と少年が、口笛を鳴らしながら小鳥の樣に踊りまはるのを、面白がつた。

象の子が三疋出てきて、一疋は太鼓を叩き、一疋は笛を吹き、他の一疋は鈴を振るのでした。それが乙吉と從妹には一番可愛ゆくて面白かつた。あとで乙吉は、小屋の後の象をつないである所

へ行つて見た。象の子は、すぐに乙吉を見つけて長い鼻をあげて乙吉の前に差出した。「坊ちやん、握手しませう」と言つたやうな親しさを乙吉は感じてゐた。乙吉は懐からパンを出して三つの象に一つづゝ與つた、乙吉は、自家にもこんな象を飼つておいて何處へ行く時にも象へ乗つてゆくと好いな、と考へた。そこへ紅と青との染分けの服をきて顔を白く塗た男が出て來て、にこ〱笑ひながら乙吉を見てゐました。何やら解らぬ言葉で乙吉に話しかけながら、乙吉を象へ乗せてくれました。廣い柔かい象の脊にまたがつた乙吉は、得意になつて、かうしてどこか歩せて見たい

と思つた。

この時、テントの蔭から乙吉の様子を殘らず覗つてゐる支那人らしい男があつた。乙吉が小屋を出て歸るときその男はにこ〱と愛相よく笑ひながら、

「坊ちやんまた明日もいらつしやい」と上手な日本語で言つた。

そしてハアモニカを一つ乙吉に呉れた。

乙吉はその夜、床の中へ入つて眼をつぶつたが、虎の橋渡りだの馬の曲乗りだのが眼のうちにちら〱したり、象の喇叭を吹く音や、ロシアの唄が耳についてなか〱眠れなかつた。

翌朝眼がさめると急いで朝餉をすませて伯母さまの家を出かけた。

伯母樣は、乙吉は家へ歸つたのだと思つてゐた。しかし乙吉はまつ直ぐに曲馬の小屋へ行つたのでした。

乙吉の自家では、今日は又日曜日だから、まだ伯母樣の家にゐることだと思つて、乙吉に注意する者は一人もなかつた。

バイロスキイの一行は、この日を打止めにして日本を去つて遠く南支那の方へ發つていつた。

一行の中には新らしく十七歳ばかりの日本の娘と、十一になる

男の兒が加へられてゐた。男の子は無論乙吉であつた。

月曜日の朝になつても歸つて來ないので乙吉の家では、品川の伯母樣の家へ電話で問合せた。すると、乙吉は日曜日の朝早く歸つた筈ですが、と云ふ返事であつた。二日たつても三日過ぎても乙吉は歸つて來なかつた。

一行が上海を經て廣東、安南と打つて廻る頃には、乙吉は音丸と名を換へられて、鈴のついた美しい服をきて象の背にまたがつてゐた。

音丸を乘せた船が長崎の港をはなれて、果てしも知らぬ支那海

へさしかゝつたときには、家へ歸りたいと言つて泣いてばかりゐた。親切らしくハアモニカを呉れた男も、今は怖ろしい顏をして泣いてゐる音丸を叱つた。そんな時には音丸は象の子のゐる檻の前へいつて冷い象を抱いて泣いた。象の子は細い目をして、ウォーと言て啼いた。それがこの可哀さうな友達を慰める唯一の親切な言葉であつた。

　或日のこと、それは大變賑やかな街を通つて町はづれの空地の小屋で曲馬の稽古をしてゐる時であつた。音丸は裸馬の背へ乘せられて、落ちないやうに馬の胴へしばりつけられた。馬の尻を馬

方が打つと馬は驚いて走つた。音丸はどうなることかと生きた心地もなく馬の鬣にしがみついてゐた。誤つて馬から轉落ちると馬遣は怒つて何やら叱言を言ひながら砂まみれになつた音丸をまた馬の背へのせた。一通り曲馬のお稽古がすんで、許されて幕の蔭へいつて泣いてゐると、そこへ見なれぬ日本の娘が現はれた。

　どうしてこんな所にこの娘がゐたのか、そんなことを不思議がる暇もなく、ふたりはおなじ境遇におかれたことをすぐに感じて、わけもなくなつかしく、いきなり手をとつた。

　船の中では逃亡を恐れてこの二人はなるべく顏を合させないや

うにしてゐたのでした。

「まあ、あなたも連られて來たの」娘は音丸の肩に手をかけてやさしく聞いた。

「うん」音丸は默つてうなづいて、眼のふちを赤く泣きはらした娘の顔を見あげた。

「お自家は何處？」

「麹町」

「ぢや東京だわね。私は神戸なのよ、あなたお母樣あるの？」さうきかれると音丸は急に悲しくなつて、手で涙をふいた。

「あゝ、お母樣もお父樣もゐるよ」

「まあ、ぢや皆樣心配してゐらつしやるわね。私母樣一人きりないの」さう言ふと娘も自分が非常に哀れにおもはれて悲しくなつた。

それからといふもの、娘は、音丸をほんとの弟のやうに蔭になり陽になつて可愛がつた。音丸も、辛いことと悲しいことを打明けて、何かとこの娘をたよりにしてゐた。音丸も、今はもう馬に乘つて火の環をぬけることも、高い撞木から撞木へ飛び移ることも平氣で出來る樣になつた。知らぬ國へいつて、そこの可憐な子

供たちから破れる樣な喝采や拍手をされる時には、何となく晴々しい喜びを感じることもあつた。

　しかし賑やかな樂の音に調子を合せて、舞臺で踊つてゐる時はまぎれてゐる心細さも、幕が降りて曲が濟んで觀客が歸つてしまつたあとに、取殘された一行の人達と、アセチリン瓦斯の灯の下で貧しい食事をして、それから毛布にくるまつて小屋の隅に眠るときは、さすがに遠くきた旅のはかなさに消えいるやうに寂しさを覺えた。

　テントの破れ目からさしこむ異樣の月影は、そばに眠つてゐる

姉さんの死んだやうにつかれた青白い顔を照した。

　音丸は寂しさに堪へられなくなつて、

「姉さん」と呼んでみた。よく眠つてゐると思た姉さんは、音丸に呼ばれると、こちらへ向いてぱつちりと眼をあけた。

「まだ眠らなかつたの？」

「僕お母樣のこと考へてゐたの」

　私だつて日本へ歸りたいと思ふもの、お前樣がさう思ふのも、無理はないわね。」

「僕等はいつ日本へ歸れるだらう」

「さうね、今年の花の咲く時分には、日本へ連れていつてやるつてバイロスキイさんが言つてゐたけれど何時の事だかわかりやしないわ。今頃はもう日本では櫻の花がさいて、みんな日傘などさしてお花見にゆく時分だわねえ。去年の五月に長崎を立つてからもう一年になるのね。私のお母様もどうしてゐるんだらう。」

「あゝあ、はやく歸りたいな。」

「でもこんなに遠く來てゐちや、どんなに思つたたつて私達二人では歸ることもどうする事も出事ないんだもの。そのうち日本の方へいつた時には歸れるから、それを待つてゐませうね。さあもう

おやすみ、こんな所をバイロスキイさんに知られたら叱られるからもう默つて休みませうよね。」

子供に添乳する母親のやうに、音丸をやさしく抱いて低い聲で子守唄を歌ふのでした。

お城の上の
星の子か
南の海の
椰子の實か

テントの隙間から見える南國の夜の空は、恐ろしいほど碧が深

く、數知れぬ星がちら〳〵とまたゝいてゐる。子守唄の一節ごとに、星が遠くの空へ飛んで行き、夢は風にさそはれて、廣い野原をはてしなくさまよふた。姉樣の顏がお母樣の顏に見えたり、子守唄が日本のお寺の鐘の音に交つたりして、音丸を深い眠に誘つた。
二人のために辛い旅の日も、春が過ぎ秋がきて、丁度二年振りの冬に、その曲馬の一行は歐洲を一巡して再び南支那から青島の方まで打つて來た。こゝまで來るともう日本人の店も多くあり、日本人にも逢へて、音丸は日本へ歸つたやうな氣になつた。青島での興行は一週間であつた。これからむろん日本の方へ渡るのだ

と思つてゐたのに、今年は日本の內地へは寄らずに、すぐに浦鹽へいつてシベリア鐵道でまつすぐにロシヤへ行くのだといふことをきいた二人は、力もなくなるほど落膽した。

　今日でもう青島の興行を終へて、明日は浦鹽へ立つといふ日の夜、二人は喋合せて小屋の隅のテントを忍び出た。

　それは十二月二十五日で、地には雪が積り、空は高く寒い夜であつた。うまく小屋を逃出したものゝ、さてこれから何處へ行くあてもなかつた。一枚の毛布にくるまつて、寒さに慄へながら、二人は街はづれから、人通りの少ない裏道をぬけて街の方へやつ

て來た。

夜は更けてゐるけれど、さすがに街々は賑かで、店の戸はおろしてあるけれど、飾窓には明い電燈がついていろ〳〵な商品が飾つてあつた。二人は逃げて來たことも忘れ、日本へ歸つたやうな氣になつて、飾窓をのぞいて歩いた。ある玩具屋の飾窓を覗いた時、そこには赤い實をつけた柊が立てられ、梢々には子供の好きさうな玩具が枝も折れるほど吊下げてあつた。二人ははじめて今夜がクリスマスの夜であることを知つた。

「今日はクリスマスなのね。」

「あゝ、さうだ。」

朝、枕もとに山のやうに積まれたクリスマスの贈物の中から眼をさました一昨年の樂しいクリスマスや、贈物も何もなく、冷い床の中から、サンタクロースのかはりに、無情な馬方に叩起された去年のあはれなクリスマスのことを、二人は思出してゐた。

忙がしさうに街を行く人の中からもしや、知つた人を見出だしはせぬかと、二人はどんなに、知つた人を探したことでせう。ある屋敷町を通つた時には、深い門の中からやさしいオルガンの音をきいた。ある家では、暖かさうなストウヴの前に安樂椅子をお

いて、そこに父親と母親とが子供たちを膝の上に乘せて、何やら樂しさうに話しをしてゐた。卓の上には甘さうな菓子がおかれ床の上にはクリスマス木が立てられて、その枝には幸福なこの家の子供のものであるいろんな玩具がさげてあるのが、窓の外から見えた。

二人は、去年のクリスマスよりは。もつとひどいこの雪の中でクリスマスの夜を過すのであらうか。

二人がある街角へきた時、そこに高い石の建物を見た。色ガラスをはめた澤山の窓からは明るい灯の色が外へながれて、そこ

からオルガンの響につれて、賑やかな讃美歌の合唱が聞えた。二人は誘はれるやうに門の内へ入つていつた。二人は惡いことでもするやうに忍足に入口に近づいて、ドアの外からそつと内をのぞいた。正面には、美しい飾裝の中に蠟の灯が星の樣にかゞやいてまん中に祭壇が作つてある。大勢の男の子や女の子は椅子に腰かけて、ぢつと讃美歌をきいてゐた。その唄は二人に聞き覺えのある三百十七番であつた。

花よりもめでにし我が子よ

殘しゝ衣だにいとなつかし
たのみなき旅路をいづこに
さまよへるか、いまは、花ちる暮

二人は唄に調子を合せながら、誘はれるやうに會堂の中へ入つていつた。

・

わが子よ、わが子よ、とくかへり
心ゆく祈を、ともにせずや

音丸は眼をあげて祭壇の方を見た。祭壇のわきに立つて一人の婦人が獨唱してゐるのであつた。たのみない旅をして今母のもとに歸つて來る一人息子の乙吉が、いま眼の前に立つてこの歌をきいてゐることを、誰がしつてゐよう。思へば、もはや一昨年の五月のことである。一人息子の行方を失つてから今にたよりを得ず夫の仕事の都合でこの青島へ來てから、今年のクリスマスに自分から進んで讚美歌を歌ひながら、わが身のうへにつまされて、唄が進むにつれて情がせまつて、涙が泉の樣に胸にみなぎつた。今

は教會の爲に歌つてゐることも忘れて、たゞもう自分の子供のためにのみ唄つてゐるのであつた。

神のつかひと、みし、わが子よ
なが父は、おとろへ、母は老いぬ
たのみなき、旅路をいづこに
さまよへるかいまは、雪のあした

乙吉はそれがまぎれもなく、自分の母親であつたことを知つた。

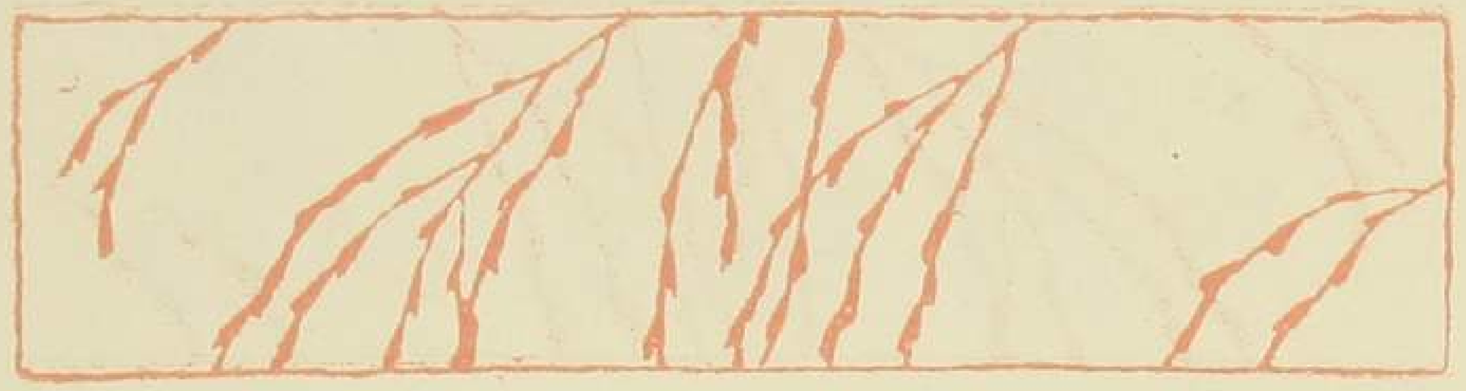
わが子よ、わが子よ、とくかへり
心ゆく祈りをともにせずや

母親はかう歌ひ終ると、身も世もあられず、悲しみとともに椅子の上に倒れた。今まで會堂の隅からこの唄をきいてゐた一人の見すぼらしい少年は、我れをわすれて、そこへかけ寄つて婦人の首にかじりついた。

「お母様、僕です、乙吉です。」

「まあ」婦人は眼を見開いて、三年振りにわが子を見た。暫くは何も言ふことが出來なかつたが、やがて喜びの涙が快く頰を傳うてながれおちた。

オルガンの音は靜かにやんだ。



浦の菜園

わたしの親は實の親
ついぞわたしを憎まねど
なぜかわたしは氣がすまぬ。

浦の菜園に出てみれば
今日も今日とてから〳〵と
さいかちの實のなりいづる。

毒芥賣の末の娘が

赤い袋をやるといふ
それもおほかた嘘であろ。
菜園のすみにころげたる
ふたまた大根のろくでなし。

ふるさと

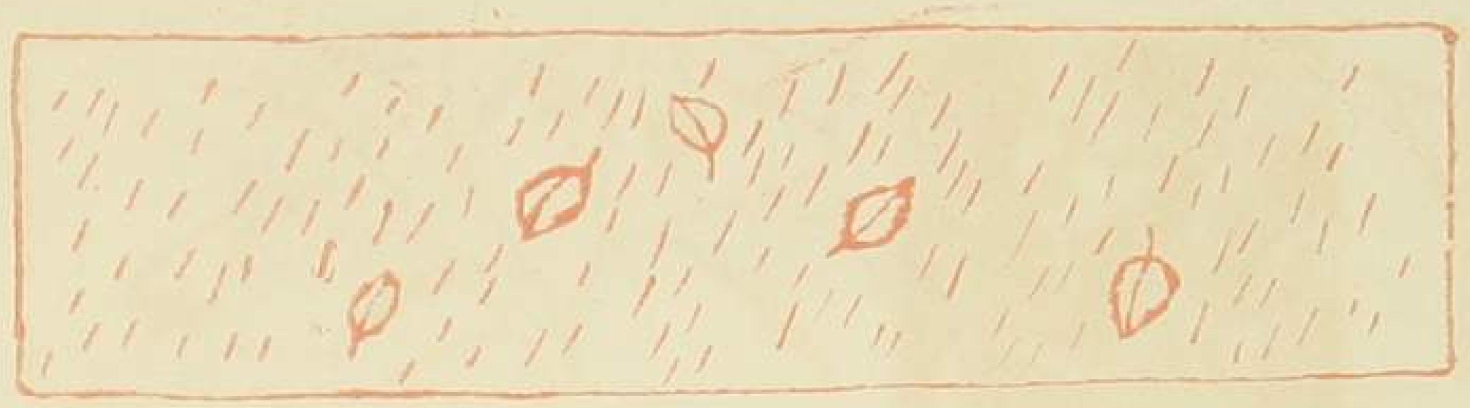
山のうへから南をみれば
どれが故郷の山ぢややら
わしがかゝさはあの山蔭で
夜は夜もすがらギイトン／＼
かあい娘のキモノを織ろと
絲をつないでゐやるもの。

常夜燈

森のお小夜がとぼしたる
山の出鼻の常夜燈。
わけて今宵はあか〳〵と
父の船かやちら〳〵と
なみだにうかびちら〳〵と。

眞實

過ぎし時も來る日も
忘れたる晝の夢なれ。
たゞ、今宵
君と共にあるこそ
眞實なり。



ためいき

わかきふたりは
なにもせずに
なにもいはずに
ためいきばかり。

涙（なみだ）

もだ〳〵と
むすぼれとけぬ悲哀（かなしみ）が
とけてながれて涙（なみだ）となりて
眼（め）よりほろ〳〵まろびなば
かう侘（わび）しうはあるまいに。

わすれなぐさ

車窓にせまる野の緑は、汽車の風にあふられ、そよ〳〵と小さい草までが、太陽の方へ頭をあげて嬉しさうに小躍りするのでした。

京子は車窓に頰をよせて、この快い旅をばあかず眺めました。

學期試驗があつた爲に、京子だけは銚子の海岸の方へ避暑にいつた家族から一番最後に取殘されたのですが、學期試驗も昨日終へ

て、今日は懷かしいお母樣に逢へるのでした。

汽車は野をゆき丘を越えて、やがて野の末に濃い藍色をした海をはる〴〵と見やつた時には、胸が躍るほど嬉しかつた。日に輝いた白金のやうな海原を、しづかに〳〵動くともなく帆船が走つてゆく。渚に近く、白い服をつけて黒いネクタイをした意氣な海鳥が飛んでゐる。

なんといふ快い旅であらう。

銚子の別莊へ着いたのはその日の午後でした。夏毎にいつも見る海ながら、見るものごとが新しく京子の眼を喜ばせるのでした。

翌朝、京子は誰よりも早く起きいで、庭に降立つて柴折戸の所から海の方を眺めました。朝凪の海はしづかに白帆をのせ、緩い波はゆつたりと汀の方へ寄せて來ては、岩に砕けて白い泡を立ててゐる。

庭の柴折戸のすぐ下は漁師の家で、茶色をした壁の隙間からは朝餉のものを煮る紫色の煙がゆるくたちのぼつてゐる。家のまはりには、名も知らぬ可憐な草花がとりどりの色に咲亂れてゐるのでした。東京の家の花壇よりもこの手の入らぬ自然のまゝの花畑の方が、懐しくやさしいだらう。

この時、丘の方から果實の籠を抱へて、素足に朝の草を踏んでくる娘を見ました。かうして露をふくんだ果實を木からすぐにちぎつてきて、朝の樂しい食卓へのせる田舎の少女はどんなに樂しいことだらう。

やがて果實を持つた娘は、京子の方へ近いてきて、丁寧にちよつとお辭儀をして、すぐ下の家へかけこみました。

その次の日には、果實を持つた娘は京子のお友達でした。娘はお濱といふ名でした。

小さな入江になつたこの漁村の西と東とは低い丘になつて、北

は一帶の松林です。西の方の丘の上には、小さな祠があつて赤や白の小旗が立られてありました。こゝから見ると綠の丘が緩い傾斜になつて。その末は大利根の川口になつてゐます。東の丘の上に立てば君が濱が弓のやう、白い波路が弦のやうに見渡せる。弓の端は犬吠の岬で、そこには白堊の燈臺が朝日をうけて桃色に見えるのです。京子はこの丘の上に立つて、燈臺の方を眺めるのが好きでした。

それは霧の深いある日の午前のことでした。京子は、いつものやうに丘の草の上に腰をおろして君が濱の方を見て居りました。

霧が低く降りて濱の砂も灰色を帶びて見える。松林もしめりをうけて綠色も深く涙ぐんでゐるやうに見えました。犬吠の燈臺は霧に閉されて、遠い〳〵外國の景色を見るやうでした。海は暗憺として白い波がしらが所々に見えるばかりで、鳥一つ飛ばない。こんな時には、岬を廻つて航海をする船のために、燈臺から霧笛を鳴らして、航路を誤らぬやうにするのでした。遠い未知らぬ國から不吉を知らせる警告のやうな、もの悲しい霧笛の音がしきりに聞えました。

間もなく空の霧がすこし切れた時、エメラルドの珠のやうな青

い太陽がそこに見えました。雲の切目からもれる太陽の光が松林の方を照らしました。すると君が濱の砂道に二人の人影が動いてゐるのを見ました。その人達は京子の方へ向いて歩いてゐるやうでした。京子はぢつと見つめてゐた。

女は三味線を抱いてゐた。男はギタの小さいやうな樂器をもつてゐました。いづれは旅から旅へ渡つてゆく藝人であらう。雨や風に幾度かさらされた、キモノを着てはゐたが、それでも面白さうにいそ〳〵と歩いてゐた。

女はそこに京子が坐つてゐるのに氣がついたらしく、ちよつと

會釋して、

「お嬢樣、ちよつとお尋ねいたしますが、香取の方へはどう參つたらよろしいのでムいませう」ときいた。香取鹿島とよく話には聞いてゐたが京子はまだ、それがどちらにあたるのか知らなんだ。

「それでは町の方へは、どう參つたらよろしいでせう」と重ねてきいた。それはこの丘を降りてあの松原をぬけると、一本道だと敎へてやつた。

「どうもありがたうムいました」とお辭儀をした。そのはづみに女の指が觸れたものか、三味線の絃が一つぴんと鳴つた。

二人の藝人が丘を降りて、松原へ入つていつて見えなくなるまで、京子は瞬もせずにぢつと見てゐた。やがて後影が小さくなつて松原の中に消えてしまふと、京子の胸はとりとめもなく迫つてくるのを覺えた。悲しさ、侘しさ、たよりなさ、何と言つたら好いだらう。待たれてゐるやうな、待つてゐるやうな、どこか遠い所へ行つてしまひたいやうな。それとて、やつと十六になつたばかりの少女に、何が不平でも不滿足でもあるのではないのに、それでゐて、何かしらものたりない、はかない心持が、あの雲を洩れる青い太陽のやうにほのかに胸をさすのでした。

京子は、昨日の夕方、カムバスと繪具箱をさげて丘を降りていつた黑い髮をもつた若者の姿を思浮べた。

悲哀のために青い繪の具、歡喜のためには黃色、信仰のためには綠色、純潔のためには白、愛のためには紅い繪の具を私は何に描かう。

綠の野の末に、夢のやうに横はつた遠い山々の彼方にローズ色の雲が棚引いてゐたら、そこにはきつと幸福があるに違ひない。

人に別れた若者は
今日も今日とて歔欷く

山をめぐれば戀人は
青亞麻の花がくれ
夢とけぬべき銀の鈴
おぼろ／＼にゆく時も

それは何處だか知らない。そこには何があるのだか知らない。遠い／＼「あるところ」へ行つて終ひたい。さうしてもう再び歸るまい。

京子は立あがつて、何處とも知れず見やつた。おそらくそれは眼で見たのではなかつた。たゞもう何處とも知らず、なつかしい

未知の世界を、心がもとめて立あがつたのであつた。

京子がすぐ傍にお濱の立つてゐるのを見出したのは、それから暫くたつてからであつた。

「お濱さん、今日は山へゆかなかつたの？」

「えゝ、お孃さま。」

「さう、ぢやあたしと今日は遊びませうね」

「海は見たいとは思ひませんけど……」

「あたし長い／＼汀をひとりでいつまでも／＼歩いてみたいと思ふわ。お濱さんは何處へ行きたいの？」

「何處へつて考へたこともござんせんけれど、一度東京へは行つて見たいとおもひます」

お濱が東京へ行きたいといふ心持は、京子には分らなかつた。

京子はもうぢつとしてゐられないほど、何處とも知れず歩いて行きたかつた。

「お濱さん、松原の方へ行つて見ないの？」

「えヽ」

京子は丘を走り降りた。お濱も後からおなじやうに從つた。丘を降りても京子は走ることをやめなかつた。白い砂の上に四つの

足跡を殘して二人の少女は、一生懸命に走つた。二人の影が小さく〳〵なつて、丘の上からはもう見えないほどになつたけれど二人はまだ走つてゐた。走つて、走つて、走りつかれて京子は砂のうへにぐつたりと坐つた。お濱も京子の傍に坐つた。京子が眞赤な頰をしてゐるのを、お濱は見た。京子はだまつていきなり、お濱の手を握つて、ぢつとお濱の顔を見た。京子の眼からはら〳〵と涙がこぼれた。何故だか、京子自身にさへその譯は分らなかつた。お濱も譯もなく悲しくなつて、京子の膝に顔を埋めて、すゝりあげて泣きだした。長い間、なんにも言はずに、世にも哀れな

孤兒かなんぞのやうに抱き合つて泣いた。何故こんなに涙が出るのだか分らなかつたけれど、お互の心持はよくわかつてゐるやうにも思へた。

やがて二人が泣くのをやめて松原の草のうへに坐つて、月見草の花束を作つてゐる頃には、霧も晴れて、松の梢を洩れる太陽が少女たちの紅い頬や、白いエプロンの膝のうへに青い光を投げてゐた。

「お濱さん、あたし髪を結つてあげるわ。」

京子は姉らしい懷かしみを持つて、お濱のみだれた髪をかきあ

げてやつた。

「お孃さんは、何時東京へお歸りなさいますでせう」

「さうね、まだ一月位はあつてよ」

「ようござんすねえ」

「えゝ」

「お濱さん、あたし今日は寂しくて仕樣がないところだつたの」

京子はなつかしさうにお濱にすりよつてさう言つたが、お濱はこんなやさしくなつかしさうに人から話されたことがなかつたので、どう答へて好いかわからなかつた。

「お濱さんはあの松原の向ふの方へ行つたことあつて？」

「えゝ、薪を採りによく行きますの」

「さう、あの向ふにもやつぱり濱邊があるの？」

「畑があつて、それから漁師の村がござんす」

「なんていふ村なの？」

「犬若」

「いぬわか？　さう、そこがもう九十九里なの？」

「岬をまはると九十九里でござんす」

「お濱さん、そこへいつたことあるの？」

「いゝえ」

「行つて見たいわねえ」

「まだだいぶお濱さんと遊べるわ。お濱さんはどんな髪が好いの？」

「わたしの髪なぞ、どんなつて、どんなのにも結つたことありませんもの」

「さうなの、ぢやあたしの好きなやうに結つてあげてよ」

「どうぞ、お嬢さん」

「お濱さんは東京に親戚かなんぞないの？」

「ムいませんの」

「知つた人も？」

「えゝ」

「あたし東京へ歸つてもつまらないとおもつてよ。お濱さんあたしの家へ來ない？」

「お孃さんのお傍においで戴けますなら……」

「あたし、お母樣にお願ひしてみるわ。もしよかつたらあたしといつしよに來るわね。」

「さうさせて戴けたら、どんなにうれしうムんせう」

「ぢやお願ひしてみるわね」

波の音が、ごうごうと、聞えてゐる。

「ねえお濱さん、お濱さんはあたしが幸福だと思つて？」

「どうして不幸福だなどゝ思ひやうもムいませんもの」

「さうね、あたしも何故不幸福だとも、何が不足だとも思ふことはないのよ。だけどもね、なんにも欲しくないほどつまらないものはないわ。お濱さんのやうに東京へゆきたいとか、學校へいつて學問が覺えたいと思ふやうだと好いんだけれど、あたしが行きたいと思ふのは何處だか知らないとこなんだもの、何處だか知ら

ないけれど、何處かにそれがあるやうに思ふの。そんなことを言たつておてつ濱さんには分らないだらうけれど、あたしゆきたいわ。さあお濱さん、上手に結つてよ」

「お嬢さま、どうもありがたう厶んす」

「忽忘草をさしてあげようね。この花はねえ、昔、青い空の片が神樣にかくれて、夜の間に地上の花に逢ひに來て、あんまり暇をとつたものでそのうちに夜があけて空へはもう歸れなくなつて、たうとう地上の花になつてしまつたんですつて、夜の星は、忽忘草になつた空の片の穴ですつてね。さあこれでよくなつたわ。ほん

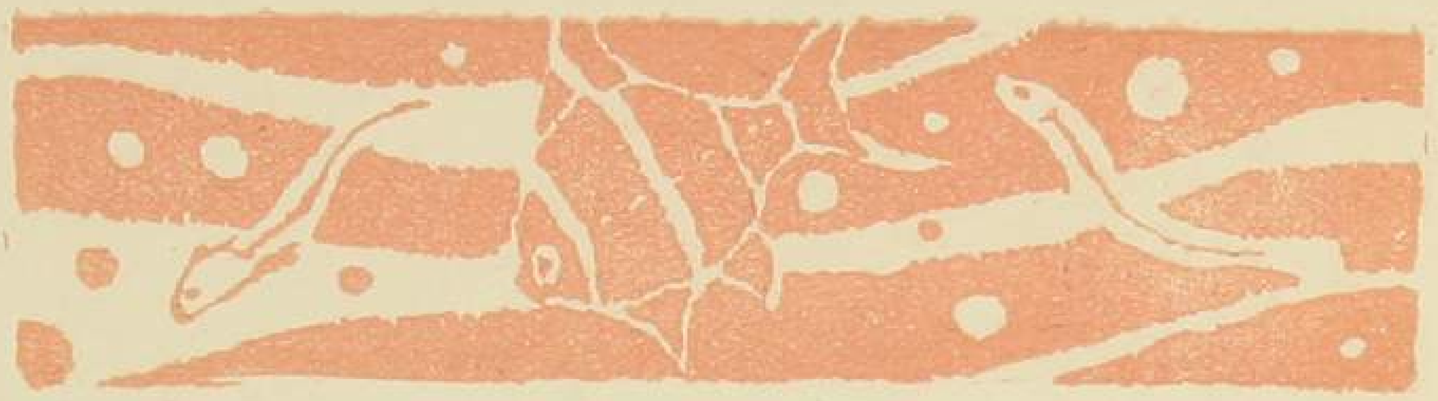
とによく似合つたわ」

「さうで厶んすか」お濱は嬉しさうに言つた。

こんなにして二人が樂しい時を送つたのは、その後あまり長い間は續かなかつた。ある朝、京子は、明日東京へ歸らねばならないことを、お濱に告げた。それは京子にもあまりに突然なことだつたけれど、お濱にはその譯は話さなかつた。

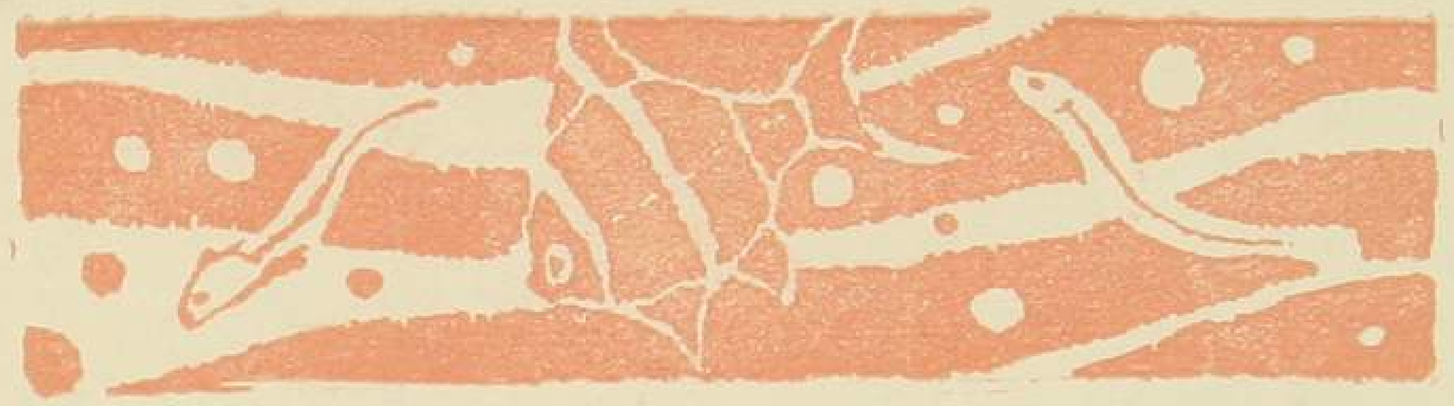
お濱は、こんなにやさしくして下さつたお嬢樣に何を別れのしるしに贈つたら好いかと、それがお濱の小さい胸をいためた。お濱は考へた末に、日頃お嬢樣が褒めてゐらした菜園の草花をお贈

りすることにきめた。
翌日はまだ暗いうちから、お濱は菜園に出て手にあまるほど草花を摘んだ。けれどこのやさしい心盡がみんな無駄になつたのは、それから十五分も經たない間の事でした。それに今日お出立になる筈であつたお孃樣は、何かの都合で急に昨夜の終列車で東京へお歸りになつたのでした。
お濱はあの丘の上に立つて、遠く東京のある方の空を眺めた。熱い涙が頬をつたつて流れた。さやうならお孃さん。

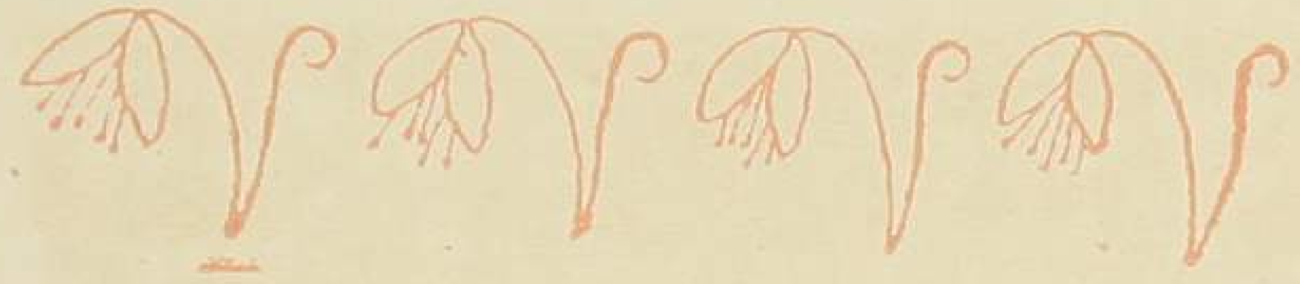


佐渡は四十五里

私が兄さんは金山へ
金がわくやら湧かぬやら
一年たつても狀が來ぬ。
二年たつても狀が來ぬ
三年三月のお十九日
朝の六つに狀が來た。



おきて火をたき燈明をつけて
とる手おそしとよんだらば
お染に來いとてかいてある。
わたしはゆくのはいとはねど
あとにのこりし母さんの
案じさんせう旅枕
佐渡は四十五里波の上。



鈴

おらがおぼこはよいおぼこ
隣のおぼこもよいおぼこ
木綿合羽に茶の小袖
野にも山にもねてみたが
松葉にさゝれて眼がさめた。
こゝはどこだときいたらば

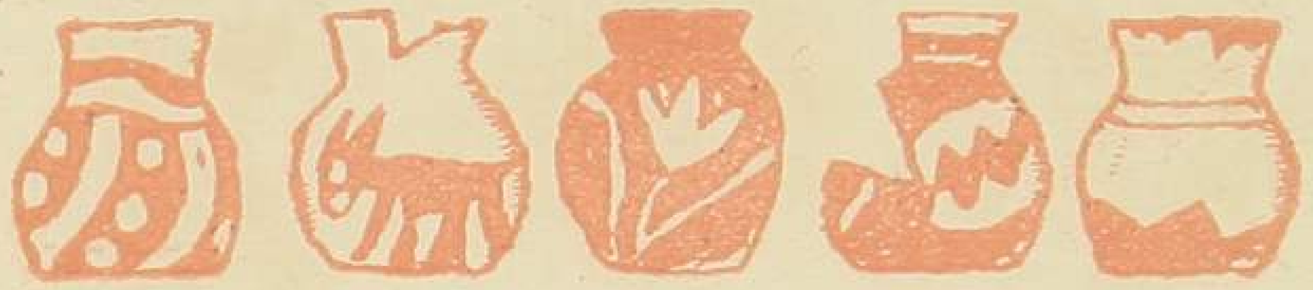
鎌倉街道の門の下
門につゞいた京屋町。
京屋町では何買うた
一に香箱二に硯
三に更紗の帯買ふた。
お千代にくれよとて買ふてきた
お千代が死んで今日七日
お千代の墓場の松の木の
小枝に鈴をさげてたも

雨の降る時やしよぼ〲ど
風の吹く時やからころど。

心づくし

木曾の御嶽夏でもさむい
袷やりたや足袋そへて
とる手おそしとほどいて見れば
振の袖から狀がでた
一筆しめしまゐらせる
狀ぢやない〳〵京みやげ

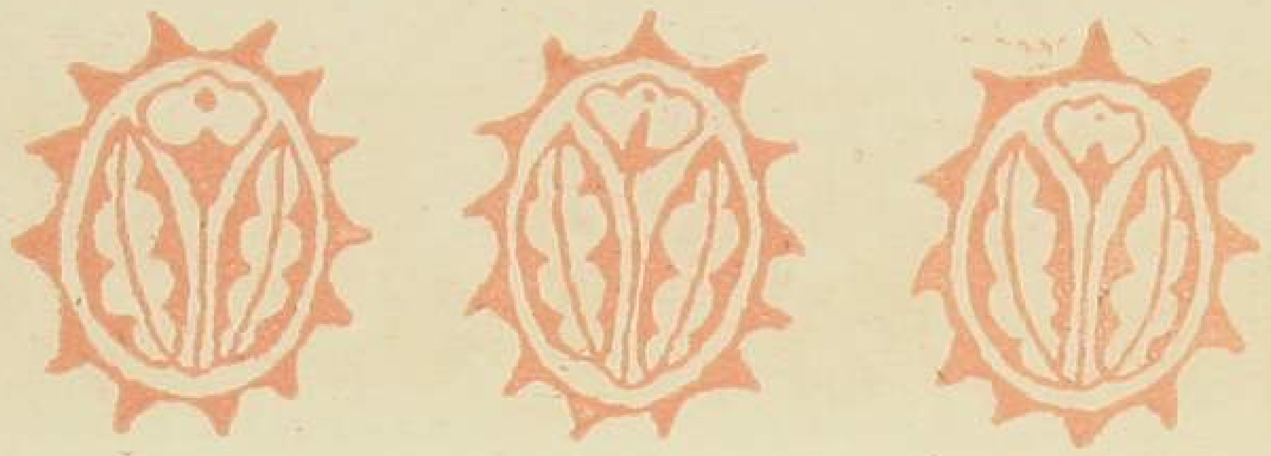
紅やお白粉京人形
これほど母はおもふゆゑ
かならず〳〵お泣やるな
なんの私が泣きませう
小袖にふくは山あらし
松の葉ぢやもの露ぢやもの。



めんない千鳥

鬼ごつこするもんよつてきな。
鬼ごつこするもんよつてきな。

ひに　ふにだるま
夜も晝も　赤い
頭巾をかぶるもんか



由良鬼ぢや。

さあ〳〵鬼がきまつた。

由良鬼はまだいな
めんない千鳥
手のなる方へ。

らくがき

ひとのうはさもたそがれの
うすらあがいにおづ〳〵と
ふたりは壁のまへにたち
その落書をよみました。
きみはなくなく袂にて
その落書をけしました。

つばくら

廣重の
海をはる〴〵くる燕。
もちくて　かきくてしぶいとて
なく〳〵逢ひにきたものを。

もしや逢ふかと

もしや逢ふかと
河岸まで出たが
見れば堤の草ばかり。
あの夜のまゝのこの捨小舟
知らぬ昔がましぢやもの。

蘭燈

和蘭屋敷に提燈がつけば
ロテのお菊さんはいそ〳〵と
羞恥草は窓の下。
玉蟲色の長椅子に
やるせない袖うちかけて
サミセン彈けばロテも泣く。

春の宿

行燈の影に文かけば
身につまされて燈心の
涙ぐみたる灯がゆらぐ。
心からにはあらねども
「わすれてたも」とつひかいて
われと泣かるゝ春の宵。

ゆく水

ゆく水の心ひとはしらなく
わが心きみしらなくに。
ゆく水は水、君は君。

伏見古城跡

仰げば遠き伊賀の山
夢路はるかによこたはる。
伏してあゆめば淀川の
水はしづかにながれたり。
綠の野邊をゆく人の
繪日傘かゝげものとはむ。

淀の古城の石垣に
はゞもて誌すわが歌の
あゝいつまでか殘るべき。
われは旅人あすの日は
たれしるべしやいざ急がなむ。

岸邊にたちて

空一めんのうろこ雲
野は眼のかぎり綠なる。
なかをしら〴〵ひとすぢの
かなしき川は流れたり。
昔の人もなげきけむ
今はたおなじ若人の

ふせたる眉に愁あり。
鷗よ鷗、やよ鷗
なれも歌なき小鳥かな。

秘密

一體世の中に、何故？ときかれて、何となればと答の出來る様なことは、ごくつまらない事に違ひない。

机にも脚が四本ある、犬にも足が四本ある。何故、犬には歩けて、机には歩けないか？

こんなことに答が出來たとて、おもしろくもなんともない。

けれど、私は何故に生れたらう？ とさうきいて御覧なさい、知つてゐる人は言はないし、知らない人は答はしない。それゆゑにおもしろいのです。富士山が一萬三千尺あらうとも、ナイヤガラ瀑布が世界第一であらうとも、そんなことは少しもおもしろくない。私達の知らぬことが世の中には、まだどんなに澤山あることだらう。それからまだこの宇宙には世界の人達が今迄に知つた事よりももつと／＼澤山の知らない事があるに違ない、けれどそれは土の世界のことである。

うら若い少女達の夢の國では、すべてが心から心へ話されるの

である。何故？　ときかれて答へられる樣なつまらない事は一つもないのである。

「須美さん。あなたはまあどうしたといふのだらうねえ、これを御覽なさい、お正月の晴衣の袖をこんなに汚點だらけにしてさ」

母樣はお須美の小袖を疊みながら言ふのでした。母樣はおつ母樣である。おつ母樣はお須美の樣な若い娘ではないのである。母樣も曾ては若い娘であつた。しかし若い娘の頃の事は忘れてしまつてゐらつしやる。それだもの若い娘の心持がおわかりになる筈はなかつた。ましてお須美が人知れぬ泪を袖にこぼした事を御存

じの筈がない。泪とさへいへば悲しく流れるとばかり、世間では思つてゐらつしやらうが、少女達の夢の國では、嬉しいにつけ、かなしいにつけ、くやしいにつけ、なつかしいにつけ、わけもなくこぼれるのです。

どうしたといふの？　といふ母樣の問に、何故ならば、と答へられることはない。お須美は、默つて微笑んでゐた。

「何がをかしいの」

何がをかしいのでもない。そんな時に、默つて微笑んでゐることが夢の國を、より美しく、より樂しいものにする掟であつた。微

笑ほど安全な答がどこにあらう「さうする事によつて、夢の國は少しも犯されず、知られずにたゞうら若い少女だけが、永遠に占領することが出來るのであつた。

「あなたは幾歳だと御思だえ？」

御立腹なさつて母様はさうおきゝになる。あたしお正月がきたらこれたけよ、と言つて指を折つて見せるのは、わけもないことでした。しかしそれは少女の夢の國の生活を美しくするにはあまりにつまらない方法でした。あまつさへ老いやすい青春の日を數へるといふことは夢の國ではせぬことなのでした。

「今年からもう十六なんだよ」

母様の方がよくしつていらした。

お須美は默つて微笑んでゐた。

夢の國では、すべてを秘密にする事であつた。秘密、秘密、秘密ほど美しいものが何處にあらうぞ。いつであつたかお須美は、學校の庭の鈴懸の木の根もとに穴をほつて、そこへSさんとAさんと三人で、思ひ〳〵の物を、お互に秘密にして小箱へ入れて誰れにも知れぬ様に埋めておいた。小箱の中には、Sさんが何を入れておいたかAさんが何を秘したかお須美も知らねば、またお須

美が何を埋めたか、AさんもSさんも知らない。毎日その木の根もとへ行つては、三人で微笑んでゐた。

「何を笑つてるの」

先生がさうおたづねになつた。

夢の國の掟は、先生さへも犯されぬ、三人は、たゞ微笑んでゐた。答をせぬ生徒を、先生はぷん〲お怒りになつて往つておしまひなすつた。三人は、それを見てまた笑つてゐた。

ある時、體操の先生がこの鈴懸の木の下で南極探險の話をなすつた。世界の秘密は南極にあり、つて先生は仰るけれど、つひ先

生の脚の下にも夢の國の秘密があることを先生はご存じなかつた。

少女の秘密は、そればかりではありませんでした。赤い帶の間にも手帖の中にも、黒い眸の中にも、指環の中にも、または視線の間にさへも「世間」の人にはよむことの出來ぬ秘密があるのです。

また夢の國の少女達は、花の散るのにも、小鳥の啼くのにも、水の流れるのにも、人間が馬の樣に笑ふのにも、先生が猿の樣にお怒り遊ばすのにも、それ〲秘密を見出すことが出來るのです。

また、雨の日に笠を被つて釣りをする人が茸に見えたり、櫻の花が蝶に見え、障子の影が鳥に見え。柳を引けば世が悲しく、子安貝を耳にすれば龍宮の唄もきこえまする。

それを何故ときく人は、山門に入るを許さず。封度の道を犯すと云ふもの、夢の國の少女達には、縁もゆかりもない人です。

強ても夢の國の少女をお知りになりたいならば、くれ〴〵も「何故」とはきかないで、林檎は木の實ですか？　とおたづねくださいまし。さうすれば、えゝ、と答へるかもしれませぬ。いゝえ、と答へるかも知れません。そのどちらを答へられてもあなたは失

望なすつてはいけないのです。

しからばこの王は何界に屬するや？　とおたづねになつたアルフレッド王に、

「神の界に屬します」と答へた少女は賢いのです。それは學校の生徒であつたからです。夢の國の少女は、たゞうれしくて泣いたことでしよう。或は、默つて微笑んだことでしよう。たとへばあの山彦です。

こちらからたづねたことを答へるばかりで、曾て自分から言つた事はないのです。

ギリシヤから以來、美しい乙女には、言ふ事は禁ぜられてゐるのです。あのニムフの娘エコヤも夢の國の少女の一人だつたのです。

ある日のこと、ジユノの夫がエコオの許へいつてゐるのを知つて行つて見ると、エコオは用もないいろ〳〵のことをお饒舌りして、ジユノの夫を引止めてゐたのです。ジアノは大そう怒つて、それからと云ふものはエコオに、答へることだけしか、ものを言ふことを許さなかつた。それから後のある日のこと、エコオのすきな少年がエコオの許を訪ねてくれた。エコオは、嬉しいことを

禁じられてゐる今は、一言も言ふことは出來なかつた。それで默つてほゝゑんでゐた。

哀れな少年は、怒つて往つてしまつた。エコオは泣いてゐた。

この物語は誰れでも知つてゐる話だが、少女の夢の國はかうして昔から誰れにも知られず來たのである。

夜の露臺奧附

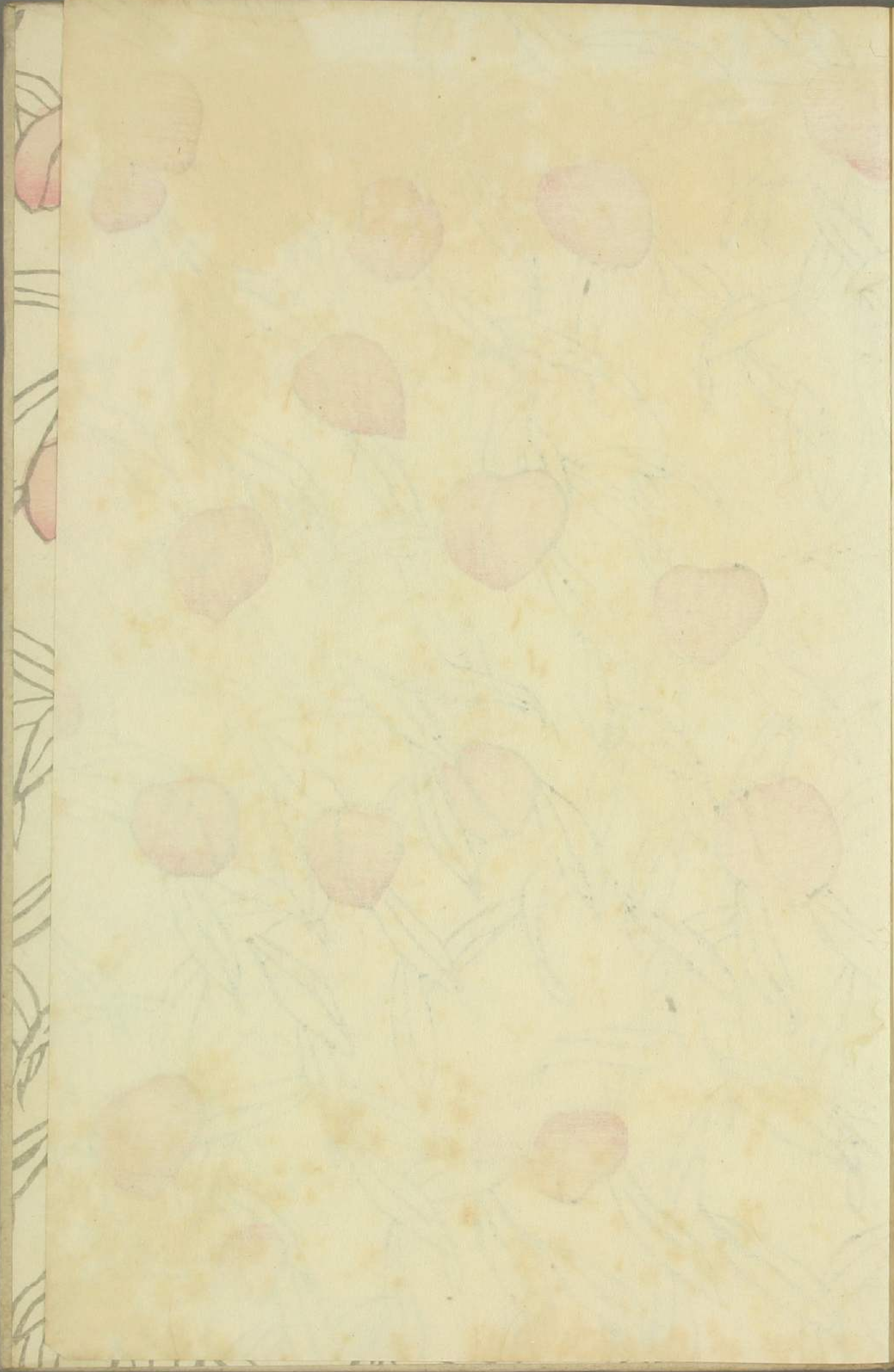
【定價九十五錢】

大正五年八月十九日印刷
大正五年八月二十日發行

著作者　竹久夢二

發行者　東京市本郷區曙町三番地　堀尾成章

印刷者　東京市麹町區有樂町二ノ一　吉原良三

印刷所　東京市麹町區有樂町二ノ一　報文社

發行所　東京市本郷區曙町三番地　千章館
電話下谷四三九九
振替東京二九二七八